

## 図書紹介

### アラン・コルバン『記録を残さなかった男の歴史 ある木靴職人の世界……… 1798-1876』

渡辺響子訳、藤原書店、1999年

中川 久嗣

原題は直訳すると『ルイ＝フランソワ・ピナゴの再発見された世界』(Le monde retrouvé de Louis-Francois Pinagot)である。ピナゴは、1798年6月20日から1876年1月31日までこの世に生きた名も無き一人の木靴職人である。人生の殆どを、自分の生まれ育ったフランス北部の低ノルマンディー地方の小村オリニール＝ビュタンで過ごし、そして死んでいった。多くの歴史が有名な人物たちに触れながら書かれるのに対して、このフランス社会史の歴史家コルバンは、ほとんど誰にも知られず、無名のままに時間の流れの中を過ぎ去っていった、誰というわけでもない一人の人間を取りあげて、彼の人生について歴史を書こうと努めたのだ。ピナゴは貴族でもなければ、政治家でもない。戦士でもなければ富裕市民でもない。むしろ極貧の中で、無数の極貧の人間たちの中に埋もれ、同時代の有力な人間たちの眼にとまることもなく、後の時代の人間たちに省みられることもなく、ただ自分の人生を、それだけのために生き、そして消えていった小さな小さな存在であった。

ピナゴでなくても誰でもよかったのだ。ピナゴが20世紀に生きるわれわれの関心を惹くことになったのは、まったくの偶然に過ぎない。コルバンは自分の生まれ故郷のオルヌ県の古文書館に出かけ、18世紀末の戸籍台帳を開き、比較的長生きをした人間をランダムに選択したに過ぎない。それがピナゴであった。ただそれが国王や伯や知事や市長や村長や議員でなければそれでよかったのだ。絶対不可欠な条件は、彼が徹頭徹尾無名でなければならない、ということだけであった。

かくしてコルバンはピナゴの生まれ育ったオリニール＝ビュタンの当時の政治的、経済的、文化的諸状況を事細かに辿り、再現してみせる。ピナゴの名前はときおり戸籍台帳や自治体の土地所有者リストなどの古文書の中に出現する。そこから家族構成や子供たちの人生も多少明らかになる(その意味で、ピナゴは、この本の邦題のように、まったく「記録を残さなかった」というわけではない)。そしてピナゴの人生に降りかかってくるさまざまな出来事が語られる。当時の木靴職人たちの生活ぶり(それは極貧であった)、フランス大革命の余波と混乱、普仏戦争による侵略、フランス近代国家による地方の整備の影響、土地の区画整理、度重なる食糧問題………。

コルバンのこの書物を読むことによって、われわれがピナゴの人生の具体的な出来事を知ることにはほとんどできない。われわれは常に、ピナゴの人生の周囲から、まるで手探りによっておおよその形を推測するかのように、状況証拠の上に推測を積み重ねてゆくことしかできない。

すべては「おそらくピナゴはこのような光景を眼にしていたことであろう」とか「ピナゴはよく、そこへ出かけていったことだろう」とかいった類の表現で語られるしかない。

「はっきりしているのは、以上で触れたすべてのことがらについて、われわれは推測することしかできない、という事実だ。したがって、これを前提としよう。だが結局のところ、推測だけで動いているのではないと自負できる歴史家などいるだろうか？」(227頁)

ピナゴが見たり、聞いたり、触れたり、感じたり、経験したりした事象を、われわれは類推によって再構成してみる。そして感情移入してみる。彼のなまなましかった生そのものを類推によって追体験してみる。確かにコルバンも言うように、推測のない過去の事実そのものを獲得できる歴史家は存在しない。しかしピナゴの生そのものの具体的で明確な記録がない以上、われわれは核心に到達することが出来ないという歯がゆさ、あるいはジレンマに終始つきまとわれるであろう。他者の客観的で絶対的な把握は不可能である。過去という他者も同じだ。だが記録の不在によって、他者の不在性の強度は決定的となる。このことは、例えばミシェル・フーコーが1961年の『狂気の歴史』で直面した問題でもあった。不在なものの歴史を書くことの不可能性。不在である存在の外側だけをなぞってその不在者の形を辿ってゆく営み。コルバンがこの書物の序章でピエール・リヴィエールの名について触れているのは、したがって偶然ではないのかも知れない。事実、訳者解説で渡辺響子氏が、『リベラシオン』におけるインタビューからコルバンの次のような言葉を紹介している。

「われわれは、空虚ということを怖れすぎます。あまりにもしばしば、イデオロギーや叙述によって、この空虚を満たそうとするのです。ですが、歴史家は、空虚を指し示さなければならぬのです。フーコーが言ったように、欠落の形を見せなければなりません。」(420頁)

さて、時間の仮借のない流れと無限の忘却の彼方に呑み込まれていった莫大な数の人間たちがいる。カエサルやナポレオンや始皇帝や織田信長といったごく少数の名の知られた歴史の中のスターたちの活躍のすぐ隣に、永遠に後世の歴史家の放つ光から逃れ去った莫大な数の無名の人間たちの無名の人生が隠れている。例えば関ヶ原で華々しい歴史的な事件が繰り広げられているまさにその時、日本のどこか遠くの片隅の、ひだのように連なる山々の陰のちっぽけな一寒村にあったささやかな人間の生活。しかしその生活も、喜びや悲しみや苦しみといった喜怒哀楽が満ち満ちた生々しい生であったはずだ。時間は永遠にそれらを呑み込んでしまった。そして永遠に消え去ってってしまった。今を生きるわれわれにはそれをどうすることもできないのだ。

例えばテレビなどである時に偶然眼にする百年も百二十年も前の古い映像(あるいはそれが幕末や明治の古い写真でもいっこうにかまわないのだが)。音のない、古ぼけてすり切れそうな白黒フィルムの世界の中で、日本のどこかの街の道行く人々が、前時代的な衣装に身を包み、いそいそと歩いている。その時思うのだ。一瞬ふっと画面の片隅を横切って歩み去って行った

その人、あるいは映っている群集の中のたった一人として隅にその姿がほんの小さな点として映っているその人、その人の人生、その人の歴史。その人の人生はどんなふうに過ぎ、どんな喜怒哀楽があり、そしてどんなふうで死んでいったのか？ 楽しいこともあったろう、嬉しいこともあったろう。そして辛いこと悲しいこともあったろう。何を食べ、何を考え、どんなことを話し、どんな生活を営んでいたのか？ 古い映像や古い写真の中にたまたま偶然に、ごく小さな点としてのみ自分が存在したという証を残すことになった無名の人々。そうした人々のそれぞれの生々しい人生。そうした人々にとっての生々しい「今・現在」。しかし時間は、それらを容赦なく過去の無限の闇の中に呑み込み、消滅させてゆくのだ。

時間や歴史に対するこのようなロマンティックな感慨は、すぐさまある種の戦慄にその姿を変えらるだろう。つまり、百年前の古く懐かしい、しかし時には同時に恐ろしい白黒世界と、それを見ている一見安心な今現在の世界の同時代性に気がつくときに。今現在がわれわれにとって生々しい現実性をもった世界であるのと同じように、百年前の映像に記録された白黒世界の人間にとってその世界はやはり生々しい現実そのものだったのだ。したがって百年前の現実世界が時間の彼方に呑み込まれてしまったように、今現在の現実性も一瞬のうちに時間の中に呑み込まれてしまうのだ。百年後の人間は、今現在のわれわれを、われわれが恐ろしい白黒世界を見るのと、ある種同じように見るであろう。そう、まるでわれわれがコルバンの書物の中でピナゴについて思いを馳せるように。

「われわれを、最もはっとさせるのは、先史時代や何世紀も前の人間が、ほぼ全て、今のところ何の痕跡も残さずに消えてしまっている、ということではなく、それが、われわれのほんの少し前に生きていた人々の運命でもある、ということだ。この時間的近さと消滅との心を乱すような戯れが、最近世を去った誰かを、その周囲の人々と共に選び出そうと私に思い至らせたのだった。ピナゴはおそらく、自分の生きた痕跡を残そうと思ったかもしれない。もしかすると彼は、そう熱望し、そのことに積極的に尽力したかもしれない。……………名声というか、少なくともなんらかの評判のおかげで、死んだあともしばらくは思い出されることもあったかもしれない。こうしたことは全て、時間がたてば消えてしまう類のことである。それが何であったにせよ、今は何も残っていない。」(13-14頁)

百年も百五十年も前の白黒世界は、ある種の懐かしさと過去に対するロマンティックとも言える感傷を、われわれの心の中にかき立てる。その世界は過去となってしまった生の世界である。それは言いかえれば、今はすでに死者となってしまった人間たちの世界、つまり端的に言って死の世界でもあるのだ。われわれは百年前の映像を、19世紀のピナゴの世界を、つまるところ過去を、死の世界としても眺めているのである。今という安心に満ちた生の世界から。時は生の世界と死の世界を仮借なく隔てる。しかし今・現在の生々しい生も、やはり仮借なく過去の死の世界へと押し流されていってしまう。言い表すことができないような圧倒的な速さで。

われわれはここで時間についてのハイデガーの難解な哲学的議論をわざわざ思い起こす必要もないであろう。それは今・現在、まさにすでにわれわれの生が経験しているところのもの、

そのものであるからだ。言葉で表象したり、反省したりする間もなく、それはすでに現実そのものである。ピナゴにとってそうであったように。

一年先、五年先、十年先はやってくる。今・現在を容赦なく過去のものとしながら。百年先も千年先も、もっと言えば百万年先さえもが、必ずやってくる。そこで突然気がつくであろう。ピナゴとは、実は他ならないわれわれ自身のことだったのだと。時間に飲み込まれてしまったピナゴは、われわれの未来の姿なのだ。

そのような現実を目の当たりにして、今・現在という瞬間に生きるわれわれ自身の生の推進力に思いを込めるか、あるいは生の享受と肯定に身を落ち着けるか、それはこうして今を生きるわれわれ一人一人の人間の、自らの生き方に対するそれぞれの哲学によって異なるのであろう。コルバンの書物が示唆することになるであろう、われわれ自身の取るべき道筋には、この二つの可能性がともに等しく含まれているのである。